王妃マリー・アントワネット

2 嵐の中

遠藤周作

朝日新聞社

ントワネット

遠藤周作

朝日新聞社

王妃 マリー・アントワネット
2
嵐の中

1979年11月25日第1刷発行

著者
遠藤周作

発行者
朝日新聞社　藤田雄三

印刷所
凸版印刷株式会社

発行所
朝日新聞社
東京・大阪・名古屋・北九州

980円
©Shūsaku Endō 1979
0023-254638-0042

目次

宮殿のなかで　7
詐欺師カリオストロ　25
トリアノン宮の日々　41
ダイヤの首飾　62
罠　79
フェルセン　95
人間喜劇　111
発覚　128

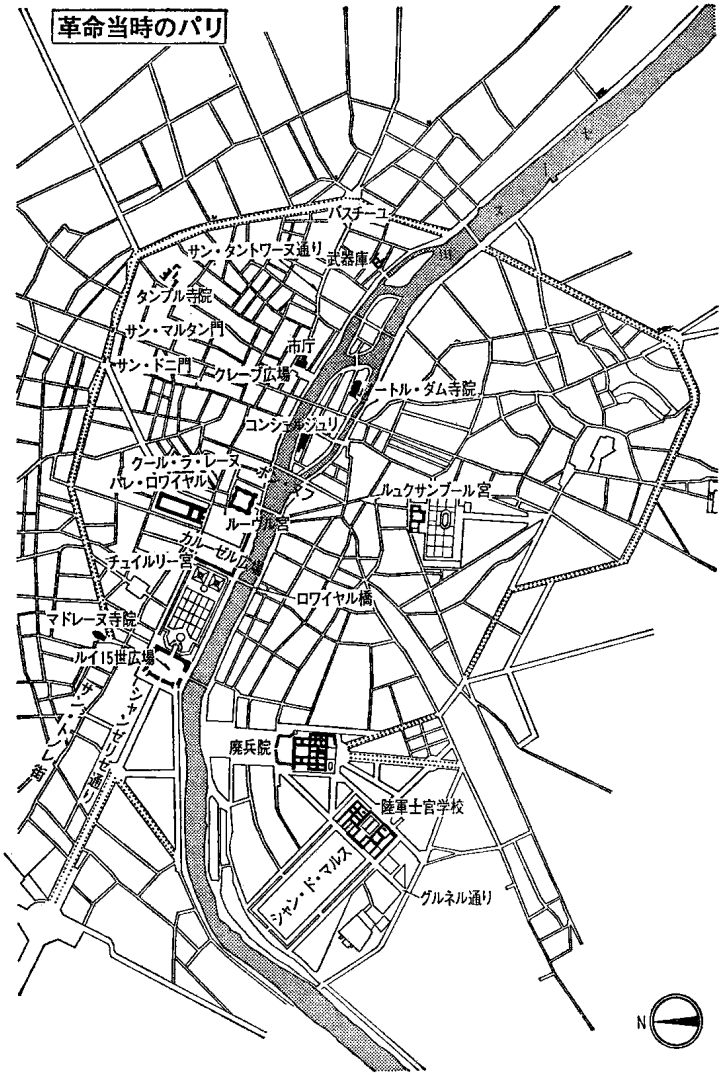
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

嵐 近づく 150
嵐 166
暴動ではなく革命が 182
危機迫る 199
スパイ 221
計画 237
脱出の夜 254
運命の岐路 279

装画・深井　国
装幀・多田　進

王妃 マリー・アントワネット

2 嵐の中


革命当時のパリ
バスチーユ
サン・タントワーヌ通り
武器庫
タンプル寺院
サン・マルタン門
市庁
サン・ドニ門
グレーブ広場
ノートル・ダム寺院
コンシェルジュリ
クール・ラ・レーヌ
パレ・ロワイヤル
ルーヴル宮
ルュクサンブール宮
カルーゼル広場
チュイルリー宮
ロワイヤル橋
マドレーヌ寺院
ルイ15世広場
サン・ラザール通り
シャン・ゼリゼ通り
廃兵院
陸軍士官学校
シャン・ド・マルス
グルネル通り
N

宮殿のなかで

「申しあげにくいことですが」
財務総監のチュルゴーは、当惑の色を顔に浮かべて国王ルイ十六世に訴えた。
「王妃殿下の御支出が、私には多少、過度のように思えます」
「王妃の……」
「さようでございます。最近、王妃殿下はたったひとつの腕輪を三十万リーブル（小林良彰著「フランス革命入門」〈三一書房刊〉によると、一万リーブルは現在の邦価にして約一億円）でお買上げになりました。これではいかに財政をたてなおそうとしても我々の努力は水泡に帰しましょう」
ルイ十六世は人の良さそうな顔に同じく困惑をみせて黙っていた。
「更に先月はそれと同じ額ほどの一対のダイヤモンドの耳飾をお求めになっております。何とぞ、陛下のお口から現在の我々がおかれている苦境を御説明いただき、御支出をお抑え頂くようお願いしたいのですが……」
ルイ十六世は弱々しくうなずき、今日中にも王妃に忠告をしようと答えた。財務総監はうやう

やしく一礼して部屋を退出した。

国王はうなだれたまま溜息をついた。この気の弱い男は妻の機嫌を損じるのが嫌だったのだ。しかも彼は彼女が悦ぶようなことなら何でもやってやりたいと何時(いつ)も思う優しさがあった。しかしチュルゴー総監の言葉を無視するわけにいかない。佛蘭西(フランス)は財政破綻をきたしているのだ。

そう、佛蘭西はもうルイ十四世時代の栄光を失っていた。アメリカの独立戦争に際し、独立側を助けてイギリスと戦った戦費は二十億リーブルに達し、ために王室の財政は破産寸前の情況におかれている。財務総監チュルゴーは必死にその立てなおしを計ったが、改革プランは、はかばかしく進んではおらぬ。そんな時、王妃が湯水のように金を使えば、国民の不満は爆発するかもしれない。

ルイ十六世はその夜、王妃にチュルゴーの言葉をそのまま伝えた。予想していた通り、彼女の顔にさっと不快の色が浮かんで、

「こんながらくたのことで、あなたのお優しい心を煩わせようとする者がいるとは、思いませんでした」

それがただひとつの彼女の返答だった。

華麗なヴェルサイユ宮殿に生きるマリー・アントワネットには王室財政の破綻など、実感としてわからない。王妃たる者がどうして、その身分にふさわしい身支度をしていけないのだろうか。そんな気持なのである。

「わたくし、あのチュルゴーは好きになれません。あの方は結局、無能ですもの。貴族たちも彼の節約政策に不満を持っていますわ」

「しかし、誰を後任にできるだろう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ルイ十六世は弱々しく首をふった。

「誰でもよろしゅうございますわ。誰が財務総監になりましても同じでしょうから」

すねた彼女がうしろを向くと、おろおろとした夫はその肩に両手をかけ、ひたすら機嫌をとるのだった。

アントワネットは勿論、国王にも佛蘭西の財政がどれほど危くなっているか、実感がない。ヴェルサイユ宮殿には相変らず七千人の近衛兵のほかに三千人の廷臣、侍僕、侍女、小姓、労務者、職人たちが蟻のように集り、無駄な給料をむさぼっているのだ。そしてルイ十六世は年間、四億七千リーブルの金をそのために使わねばならなかった。

無駄な給料。それは確かに無駄な給料にちがいなかった。マリー・アントワネットには毎日、女官長に十二名の侍女、首席侍従、首席厨房長、主馬頭、経理官、宮中司祭がついていたが、寝台の埃ひとつを払うのも、その役目の者でなければ決して働こうとしなかった。ある日、寝台の汚れに腹をたてたマリー・アントワネットが侍僕にそれを注意すると、その侍僕は平然として、こう答えた。

「王妃さまが今、寝台にお休みでしたら、埃を払うのは私の仕事でございましょう。しかし王妃さまはただ今、寝台にお伏せになっていらっしゃいませぬ。ですからこれは家具にすぎません。家具である以上、家具係が勤めるべきだと存じます」

無駄な給料が無数の人間に支払われ、そして無駄な行事と形式とが毎日、繰りかえされていた。たとえばルイ十六世は毎朝、きめられた時間に目をさまし、寝まきのまま王族たちと侍従長、宮廷の各長官、叔母たち、貴族たちの挨拶を受け、それがすんでから十字を切り、初めて理髪師、衣裳師の手をかりて衣服を着かえねばならなかった。この朝の馬鹿馬鹿しい儀式は儀式である以

上、やめることはできないのだ。ためにルイ十六世は朝早く狩に出て、この儀式に間にあうように宮殿に戻ると、もう一度、寝まきに着かえたこともあった。

湯水のように金が使われ、無意味な行事と形式とが相変らずヴェルサイユ宮殿で続けられている間、宮殿の外の佛蘭西は喘いでいた。物価は賃金にくらべて約三倍にはねあがり、財源はきびしい増税によってまかなわねばならなかった。そしてその税金の大半は特権を持つ貴族や教会からではなく、貴族と聖職者ならざる者——第三身分と言われた商人や農民たちから取りたてられた。

身分ある家柄に生れたというだけで免税特権を持っている貴族は約三十万。それに金をためて没落貴族の株を買い、この階級に成りあがった新貴族は十万。これにたいして第三身分の者は約二千六百万というのが当時の佛蘭西の人口構成だった。

生活の苦しさと税のとりたてに二千六百万人の人間たちが、あちこちで喘いでいた。彼等の怨嗟の声は次第に次第に大きくなっていく。

だがヴェルサイユ宮殿では、相変らず華麗なメヌエットの調べが流れ、銀燭ゆらめくなかで舞踏会がひらかれ、晩餐会が催されている。貴族たちの大部分も国王夫妻も人民の怨嗟の声がいつか大きな叫喚となって渦まき、堰を突き破って怒濤のように流れ出す日が来るのにまだ気づいていない。

アントワネットのこの頃の楽しみは、オペラ座での舞踏会、宮殿の庭での散歩、そしてトランプの賭けだった。

勝負事。トランプの賭け。

ヴェルサイユ宮殿の遊戯室で貴族や貴婦人たちがマリー・アントワネットを中心にしてチップとカードとを今夜も並べていた。

しなやかな、美しい指で王妃はトランプを切り、皆にくばった。

「王妃、勝負をなさいますか」

シャルトル公爵は皮肉な笑みを浮かべてアントワネットに勝負を挑んだ。

あれ以来——そう、仮装舞踏会で彼女に侮辱を受けて以来、公爵は心に恨みを抱いていた。勿論、表面ではこの恨みと怒りをあらわすことなく、王妃にたいする貴族の作法を守っていたが、その冷たい眼に時折、憎しみをこめて、アントワネットを見ることがあった。

「いたしますわ」

アントワネットは無邪気に答えた。彼女もまたシャルトルにたいしてもう特別の感情は抱かなかった。かすかな軽蔑が残っているだけだった。

「幾ら、お賭けになります」

「一万リーブル」

「一万リーブルでございますか。私は十万リーブルを賭けます」

どよめきが起った。当時、十万リーブルと言えば現在の日本の金にして十億円を下らない金額だからである。奢りに馴れたヴェルサイユの貴族たちもトランプの賭けにこれほどの金を使う者は少かった。

マリー・アントワネットの顔に少女時代から見せた負けず嫌いの表情が浮かんだ。

「公爵がお望みでしたなら、お相手いたしますわ」

と彼女は微笑をたたえながら、周りを見まわした。

「私はおります」
「わたくしも」
他の貴族たちはカードを捨てて二人の勝負を見守ることになった。チップが卓上につまれた。
「いかが？」
アントワネットはその身分に相応わしいスリー・カードを卓上に並べてみせた。
「王妃。私は、これでございます」
シャルトル公爵は皮肉に笑い、自分のカードをゆっくり、ひっくりかえした。フラッシュだった。見物人のどよめきが起った。
「いいわ。負けましたのね」
微笑を浮かべようとしたが、マリー・アントワネットは口惜しさを堪えることができなかった。
「もう一番、公爵はわたくしと勝負なさいますか」
「受けさせて頂きます」
夜を徹して賭け事は続いた。驚くべき金がマリー・アントワネットを中心にこの賭け事で動き、王妃自身も王室の会計係から次々と金を借りる始末だった。
そんなある夜ふけのこと――、
しばし、賭け事の騒ぎがおさまった時、マリー・アントワネットは別の卓子で一人の貴婦人がつくねんと、トランプのカードを置き並べているのに気がついた。そのうりざね顔に憂いをただよわせ、じっとカードを見つめているのが王妃の好奇心を唆った。ランバル公爵夫人だった。
「何をなさっていらっしゃるの、公爵夫人」
王妃はやさしく訊ねた。

夫人はあからめた顔をあげると、
「占いでございます」
「占い？　おできになるの」
「はい。下手ではございますが……」
「皆さん、お聞きになりましたこと？」
マリー・アントワネットは嬉しそうに周りを見まわした。こんな時の彼女はあたらしい遊びを見つけた少女のようだった。
「公爵夫人は占いをなさいますのよ。わたくし、みて頂きたいわ」
マリー・アントワネットは一人ぽつんとしている若い公爵夫人を慰めるためにそう言ったのである。我儘な彼女にも衝動的にそんな優しさを見せる時がときどき、あるのだった。
椅子から立ちあがり、この相手の卓子に移った王妃は、
「さあ、あなたの占いで、わたくしの運命を占ってくださいます？」
「しかし、王妃さま、わたくしは習ったばかりでございます」
恐縮したランバル公爵夫人はうつむいて、
「お当てする自信はございません」
「いいえ。あなたなら、きっとお上手だわ」
公爵夫人は仕方なく、トランプをアントワネットにわたして思いついたまま、四枚のカードを並べてほしいと頼んだ。
「でも王妃さま。右手ではトランプをお取りになりませんように」
「左手を使うのですね」

「それがジプシーのやり方でございます」
「あら、あなたの占いの先生はジプシーなのですか」
「いいえ。今、巴里で評判のカリオストロ博士でございます」
「カリオストロ博士。それは、言いにくい名ですこと」
王妃は可笑しそうに笑い、言われる通り左手でトランプを並べた。
公爵夫人は更に四枚を先のカードの上におかせた。それから一列ずつをひっくりかえすと、
「王妃さまはお生れの時から名誉とお血すじとを生涯、神からお約束になられております。これはそれを示す素晴しいカードでございますわ。申し分のない御健康にも恵まれます」
アントワネットは楽しげに微笑し、うなずいてみせた。別段トランプ占いなど信じてはいなかったが、よく言われること、ほめられることはマリー・アントワネットはいつも好きだった。
「お悩みごとは勿論おありでも、あかるい御性格がそれを克服されます」
「わかりましたわ。公爵夫人。それよりわたくしの今後のことは見て頂けませんの」
「それはこの最後の列のカードに出ていると存じますわ」
ランバル公爵夫人は、小さく十字を切り、それから最後の二枚をめくった。
瞬間、彼女の顔色が変った。憂いがそのうりざね顔にさっと走り、うつむいた。
「どうしたのですか」
「いえ……何でもございません。これからもお倖せでございます」
「あなたは……何か、かくしていますね」
最後の列のカードにはスペードの黒い模様が二枚とも浮き出ていた。王妃はそのカードと公爵夫人の顔とを交互に見つめ、不安そうに眼を見ひらいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com